

和合亮一

震災6日後から ツイッターに紡いだ詩

大学時代から詩作を始め、現代詩の旗手として注目されてきた和合さん。震災発生の際は、勤務先である福島県伊達市の高校で会議の最中だったという。立ってられないほどの揺れ。地鳴り。割れる窓ガラス。その晩から家族とともに3日間を避難所で過ごした。携帯電話で見たテレビは、想像を超える被害を刻々と伝えた。

連作「詩の礫」を書き始めたのは、妻子が放射能を避けて山形に避難し（1カ月後に帰宅）、自宅にひとり残った3月16日からだった。

「30世帯もの集合住宅に残っているのは僕も含めてごくわずかの人のみだけでした。福島はもう終わりか

もしれない。けれども僕がここを去るのは、近くに住む両親を看取ってからになるだろうと。そこまで覚悟していました」

激しい余震が続き、また、ニュースを見るたび津波の死者数は増えていく。何度も出かけた三陸の海辺も壊滅した。原発でもっと大きな爆発が起きればどうなるのか。「本質的な孤独のようなものを感じ



「詩の学校」で詩の書き方を指導し、和合さんが各人の詩の一部を抜粋。一つの詩に仕上げたものを「福島群読団」として朗読した



「プロジェクトFUKUSHIMA!」の一環で、一般応募者を対象に「詩の学校」を開催



被災地の思いを発信し続け、 共感を広げる「言葉の力」

自らも被災しながら、震災直後からツイッターで自作詩を発表してきた和合さん。その「言葉」は多くの共感を呼んだ。14カ月を経ての思いを伺った。

「30世帯もの集合住宅に残っているのは僕も含めてごくわずかの人のみだけでした。福島はもう終わりかもしれない。けれども僕がここを去るのは、近くに住む両親を看取してからになるだろうと。そこまで覚悟していました」

「激しい余震が続き、また、ニュースを見るたび津波の死者数は増えていく。何度も出かけた三陸の海辺も壊滅した。原発でもっと大きな爆発が起きればどうなるのか。『本質的な孤独のようなものを感じ

る中、自分が生きてきた証を記録しておくたかった。理性ではなくもつと動物的な、強い衝動でした。紙に記録しても誰の目にもふれないかもしれない。ふと思いついたのが、ツイッターに書き込むという手段だった。

「手続きしたままほとんど使っていなかったんですが、これで発信すれば誰かに届くかもしれないとひらめいたんです」

「パソコンに向かい、まさに礫のごとく詩を投げかけた。それは例えばこんな言葉が始まる。」



和合さんの近著「ふたたびの春に」(祥伝社)

「頭の中は白熱したまま2時間、詩を書き続け、気づいたら171人がフォロワーしてくれていました」

大きな動きにつながり 広がっていった輪

本日では被災六日目になります。物の見方や考え方が変わりました。放射能が降りています。静かな静かな夜です。

「頭の中は白熱したまま2時間、詩を書き続け、気づいたら171人がフォロワーしてくれていました」

ツイッターでは気になる人を登録（フォロー）しておけば、その

人の投稿（ツイート）をリアルタイムで閲覧できる。翌日から和合さんが綴る詩のフォロワーはみるみる増え、わずかな期間のうちに1万人を超えた。

「メッセージを受け取りながら言葉を書き綴り出していく感覚は、まるで舞台で語っているようでした」

「当時の福島のまちは本当に閑散としていました。駅も封鎖していたし、ここに人が来るとは思えないとの声もありました。でも皆何かしたかった。それで、よし、1万人を集めよう！」

「当時の福島のまちは本当に閑散としていました。駅も封鎖していたし、ここに人が来るとは思えないとの声もありました。でも皆何かしたかった。それで、よし、1万人を集めよう！」

「当時の福島のまちは本当に閑散としていました。駅も封鎖していたし、ここに人が来るとは思えないとの声もありました。でも皆何かしたかった。それで、よし、1万人を集めよう！」

「当時の福島のまちは本当に閑散としていました。駅も封鎖していたし、ここに人が来るとは思えないとの声もありました。でも皆何かしたかった。それで、よし、1万人を集めよう！」

Ryoichi Wago

1968年福島生まれ。詩人、高校の国語教師。1999年に第一詩集「After」で中原中也賞、2006年「地球頭脳詩篇」で晩翠賞を受賞。東日本大震災直後からツイッターで作品を発表する。震災後の詩集には「詩の礫」「詩の黙礼」「詩の邂逅」がある。

被災地の今の現実を 伝え続ける言葉の橋を かけ続けていきたい。



和合さんの詩は数多くの合唱曲にもなった。歌うことで伝わるものもある。詩が、人々の心に浸透していく。

本当の復興とは 誇りを取り戻すこと

被災地は復興へと歩を進めている。だが、道のりはまだ長い。「外の人は震災から1年以上が過ぎ、明るい笑顔も戻ってよかつた」と話をまとめがち。でも三陸の壊滅した港町に人は帰ってこないし、問題は山積しています」だから、被災地からの発信が重要なのだと和合さんは考える。

「支援の手は、ある時パタリと途絶えるもの。多くの支援を受けて学んだことを我々の文化として築き上げ、橋をかけて伝えなければ。その営みを通してこそ、復興とは何か、まちづくりとは何かということが見えてくる。私は、詩人として言葉の橋をかけていきます」被災者からの声は、時として実に小さい。話してくださいと言うだけでは、口を開く人は少ない。「だから行政にもつと耳を傾けることをしてほしい。マスコミに乗らない多数の思いを、ていねいに耳を傾けて五感で知ってもらいたいですね」

最終的に福島の人々が取り戻すべきは「土と緑」と言う和合さん。草むしりもできない。手についた土はすぐに洗う。子供たちはその現実の中で生きている。

「福島の美しい土と緑を取り戻した時、住む人の誇りも戻るでしょう。それが、本当の復興ということなのだと思います」

和合さんが今もツイッターで発表し続ける詩は、多くの支持を集める。被災地からの思いは、世界に届いていく。

最後に震災1年後の今年3月刊行された『ふたたびの春に』（祥伝社刊）から。

『握手』

握手をしよう

あの日から
変わってしまったこと

少しも変わらないこと
その両方を

お互いの手にこめて

固く

確かめ合おう

僕らの

故郷のしるしを

雲が浮かび

木々が芽吹き

川が流れ

鳥がさえずり

山はゆるがない

やがて

花が咲く

あなたの手は

わたしの手を握る

だから

あなたの手を握ろう

あなたの手を握り返そう